第７章　歴史文化資源の保存・活用の基本的方針

第６章で国見町歴史文化保存活用区域の設定を行い、町全域をその区域と定めた。本章では、本町における歴史文化資源の現状と課題から保存・活用の基本方針を導き出し、基本方針から具体的な取り組み方針を定める。

１　保存・活用に関する現状と課題

歴史文化資源の保存・活用に対する基本方針を定めるに際し、歴史文化資源の現状と本町が抱える保存・活用に関する課題を以下に示す。

（１）幅広い分野と多様な価値を持つ国見の歴史文化を把握するための課題

本町は、平成 27（2015）年度から歴史的建造物悉皆調査事業及び歴史文化基本構想策定に向けた既存資料整理作業（郷土史家菊池利雄氏資料整理事業）、歴史文化資源情報の抽出作業などにより、継続的に歴史文化の総合的な把握を進めてきた。一方、国見町郷土史研究会は長年にわたって、住民が主体となり、地域の歴史文化を研究・調査している。

しかしながら、行政主体と研究会の調査では手法や基準に違いがあるため、歴史文化資源の総合的な調査は十分とはいえない。また、町内全域に共通の認識を定着させるような活動を地域の研究会や郷土史研究家と連携し発信していない。

このような現状から、幅広い分野と多様な価値を持つ本町の歴史文化を把握するための課題は、次の２点である。

写真 7-1　既存資料整理作業
（郷土史家菊池利雄氏資料整理事業）

①	歴史文化資源の各分野間において調査歴・情報量に隔たりがある。また、歴史文化資源の相互関係・各ストーリー（関連文化財群）との関係性についても検証・整理が十分尽くされたとはいえず、現況把握も不十分である。
②	町民が身近に歴史文化資源が存在することを知らない、あるいは歴史文化資源として認知していない。把握された歴史文化資源の情報について、成果報告や公開が不足している。

（２）歴史文化をより良い状態で後世へ継承するための課題

公有化された歴史文化資源は一部にすぎず、大多数が個人･地域等が所有し、これらに維持管理や保存･継承が委ねられている。

このような現状において、本町では有形の歴史文化資源の建造物を中心に修復が行われ、近年では県重要文化財「旧佐藤家住宅」の修復を行った。国登録有形文化財「奥山家住宅主屋・洋館」・町指定有形文化財「沼田神社本殿彫刻」･「東大窪八幡神社」においては､東日本大震災災害復旧事業を所有者が行い、町が技術的な助言と補助・手続きに関する支援を行った。

無形の歴史文化資源においては、「内谷春日神社太々神楽保存会」と町が連携し平成 28（2016）年度から全町の子どもを対象とした神楽教室に取り組み、後継者の育成を支援し、また、平成 27（2015）

年度から２年間、演目の復活事業、映像による記録事業を実施した。

更に、平成 26（2014）年度に町指定史跡「岩淵遺跡」の修復再建整備事業、平成 28（2016）年度に「義経の腰掛松」における古木保存施設と便益施設の整備を行い、平成 30（2018）年度からは国指定史跡「阿津賀志山防塁」下二重堀地区における史跡・歴史公園の整備事業を進め、町所有の歴史文化資源を中心に整備・充実を行っている。

写真 7-2　義経の腰掛松
古木保存施設・便益施設整備

平成 27（2015）～28（2016）年度に整備した国見町文化財センター「あつかし歴史館」は、歴史文化資源の収集･活用･発信を担う拠点として整備し、各種の取り組みを行っている。

また、全国で近年多発する災害や盗難・損壊事件に対する防減災・防犯対策に関しては、周知・啓発を広く行い、文化財パトロール及びモニタリングを行っている。町所有の歴史文化資源については、必要に応じて防犯・防火設備を設置するなど対策を講じている。

写真 7-3　内谷春日太々神楽演目指導

しかし、適切な管理・整備や保存状態の改良、後継者育成の仕組みづくりは歴史文化資源の一部に限定されている。また、近年の自然災害や異常気象、集落の過疎化による歴史文化資源の放置によって起こりうる損壊や盗難への対策も十分とはいえない。

このような現状から、歴史文化をより良い状態で後世へ継承するための課題は、次の４点である。

①	歴史文化資源の適切な維持管理・保存手法及び修復技術の適用が一部に限られている。
②	無形の歴史文化資源の継承を担う後継者育成が十分ではない。
③	阿津賀志山防塁など歴史文化資源の保存・活用を図るための施設整備が不足している。
④	近年多発する災害や損壊・盗難事件に対する防減災・防犯対策が十分ではない。

（３）関連文化財群（ストーリー）をとおして国見らしさを発見・発信するための課題

個々の歴史文化資源の理解を深め、ストーリーを共有する関連文化財群を通して、国見らしさを発見･発信することは、個々の歴史文化資源の価値を相乗的に高め、保存と活用の意識を向上させるものである。このため、本町では歴史文化資源に対する案内ガイドや周遊ツアーなど観光振興との連携や周遊性を向上する事業を展開してきた。

写真 7-4　文化財ボランティアの活動

また、歴史文化資源の案内ガイド事業については、本町の歴史文化資源の価値・魅力を共有するため、平成 20（2008）年度に「国見町文化財ボランティア」制度を開始した。本町を

訪れる団体等に対して現地での案内ガイドを実施し、平成 30（2018）年度は 48 団体 2,439 人を受け入れている。このほか、多様な本町の魅力を発信するために、「旅づくり塾」（平成 28〔2016〕年度）「くにみ案内人養成講座」（平成 29〔2017〕年度~令和元〔2019〕年度）を開催し、周遊性の検討とともに歴史文化資源を含めた町の魅力について新たな視点でのガイド方法の検討を行っている。

写真 7-5　周遊観光ツアー
「くにみしゅらん」

本町の観光振興はグリーンツーリズムと歴史文化ツーリズムが中心となることから、歴史文化資源も重要なコンテンツとして位置付けられる。「くにみしゅらん」（平成 26〔2014〕年度開始）・「くにみ周遊ツアー」（平成 29〔2017〕年度開始）などの周遊観光ツアーにおいては、多くの参加者が魅力に共感し、保存に向けた意識を広く共有する機会を創出してきた。

しかし、本町の歴史文化資源の魅力を伝えるために不可欠な案内ガイドの担い手が減少しているため、多くの来町者が本町の魅力を十分に体感できる機会を創出できていない。

このような現状から、関連文化財群（ストーリー）を通して国見らしさを発見・発信するための課題は、次の３点である。

①	より多くの来訪者に対応する歴史文化資源の案内ガイドを担う人材が不足している。
②	より多く歴史文化資源の価値を共有する重要な手段として、継続した来訪機会（リピーター）の創出に向けた取り組みが不足している。
③	周遊性の向上と案内板の設置を進めているが、これまで整備された歴史文化施設と連動した活用が不足している。

（４）歴史文化の価値を広く共有するための課題

町民はもとより、広く歴史文化の価値を共有するためには、正しく詳細な価値の普及・啓発に努め、対象となる資源への理解を深めることが重要である。

これまで歴史文化資源の価値をより多くの人が理解、共有できるように、次世代へ継承する担い手（所有者や地域住民）に対しては、誇りや愛着の意識を醸成する取り組みを行い、町外者に対しては、保存・継承・活用への理解と支援の契機となる取り組みを続けてきた。

町の広報やホームページ・SNS など多様な媒体を活用した積極的な情報発信は、平成 29（2017）年度から運用が開始された「国見町観光ポータルサイト」や毎月発行される「広報くにみ」における「歴まちさんぽ」において、町内外に定期的・継続的に行われている。

図 7-1　広報くにみ・歴まちさんぽ

また、学習機会の創出と充実では、歴史まちづくりシンポジウムなどによる教育普及や学校教育と連携したふるさと学習「国見学」、生涯学習と連携した町民講座、住民団体の国見町郷

土史研究会と連携した公開研修講座を開催している。

平成 29（2017）年度に発足した「くにみ阿津賀志山防塁活用推進懇談会」は、阿津賀志山防塁の活用を推進し、保存継承に向けた担い手・理解者・支援（応援）者のネットワークの構築を担う住民組織である。阿津賀志山防塁の歴史性や隣接して栽培されている中尊寺蓮の美しさに共感し、整備が進む歴史公園の活用と関連する歴史文化資源との連携を考える人々からなり、活用に向けたワークショップやイベントを行っている。

しかし、情報の発信は限定的で一方的なものが多く、また、様々な学習会やイベントを開催しても参加者が固定化しているため、広域で各世代にわたって共有できる仕組みづくりが必要である。

このような現状から、歴史文化の価値を広く共有するための課題は、次の３点である。

写真 7-6　阿津賀志山防塁の活用（ハスまつり）

①	より広域に、より多様な人々に届く、様々な媒体による積極的かつ継続的な情報発信が不足している。
②	普及・啓発の効果を波及させるために効果的なテーマや対象を絞らない多種多様な学習機会の提供が不足している。
③	保存継承に向けた担い手・理解者・支援（応援）者のネットワークの構築など、人と人をつなげる取り組みが不足している。

（５）一人ひとりが歴史文化の継承を担うための課題

歴史文化資源の保存･活用には、個人や地域の役割が大きく、広く歴史文化の継承を担う意識の醸成を図ることが求められている。

指定等文化財の所有者や保存継承団体への支援はもちろんのこと、歴史文化を活かしたまちづくり・地域づくりへの活動支援を行うことで、地域が主体となった保存・活用が図られている。「小坂まちづくりの会」「大木戸歴史むらづくりの会」は、歴史文化資源を活かした地域振興に取り組み、地域に存在する歴史文化資源への理解と保存意識を醸成し、持続的な地域の維持をめざしている。本町では、国見町まちづくり推進協議会を通じた助成により活動を支援している。

また、町内に存在する歴史文化資源の保存・活用、情報交換や連携を図るために、平成 26（2014）年度に「国見町歴史まちづくりフォーラム」が発足した。個々の指定等文化財や個別の地域だけではなく、担い手となる人々が町全体の歴史文化資源に対する保存継承についての議論を深め、活動を展開している。今後も地域の主体的な組織や団体を育成し、さらなる会員の確保と持続的な活動を維持していかなければならない。

写真 7-7　郷土史研究会方部研修（平成 29〔2017〕年度小坂地区）

写真 7-8　（平成 29〔2017〕年）第９回国見町歴史まちづくりシンポジウム

このような現状から、一人ひとりが歴史文化の継承を担うための課題は、次の２点である。

①	所有者等や地域の団体が実施する保存継承活動・歴史まちづくり活動に対して、行政との絶え間ない関係の構築及び継続した支援が十分ではない。
②	保存を担う全町的な保存継承活用団体による協議会の主体的な活動が不足している。

２　保存・活用の基本方針

本町が抱える保存・活用に関する課題を踏まえた、歴史文化資源の保存・活用に対する基本方針と具体的な取り組みに向けた考え方は、次のとおりである。

（１）基本方針

かつて障壁となっていた福島盆地北縁の山並み。境界の地を象徴し、時代の転換点となる出来事が刻まれた阿津賀志山防塁。街道が整備され、ひと・ものの往来が盛んになり、繁栄した各宿場町。農作物を育て、生活基盤をつくり、寛容で勤勉な人間性を育んできた国見の風土と自然。地域コミュニティの源として今も受け継がれている農業と信仰による地域文化。

これらの歴史文化資源とその周辺環境が一体となってつくり出す価値は、身近にあるがゆえに気づかないことが多い。「あたり前にあるもの」こそが国見ならではの「たからもの」であると認識すべきである。

1000 年以上もの時の流れの中で、この地で暮らす人々の、日々の営みから紡ぎ出された知恵や文化の積み重ねが、今の私たちが引き継いだ歴史であり文化である。加えて、この地の歴史文化を育んだ環境や景観も、当然に守り、次の時代に伝えるべきものである。そのためには、歴史文化資源の特徴を把握し、その価値を理解し、大切に思う「こころ」と「ひと」を育てるためのまちづくりが重要となる。

私たちは、この地に暮らした人たちの思いが込められた歴史文化資源に、今を生きる私たちの思いや願いを付け加えて、次の人たちに「つなげる」必要がある。郷土に誇りと愛着を持ち、国見らしさを引き継ぎ、つなげるために、次の５つを基本方針とする。

	歴史文化資源の保存・活用を通して	
歴史文化資源の保存に関わる基本方針	・過去と現在をつなげる	幅広い分野と多様な価値を持つ国見の歴史文化を把握する。
	・現在と未来をつなげる	歴史文化をより良い状態で後世へ継承する。
歴史文化資源の活用に関わる基本方針	・資源と資源をつなげる	関連文化財群（ストーリー）を通して国見らしさを発見・発信する。
	・人と人をつなげる	歴史文化の価値を広く共有する。
	・人と資源をつなげる	一人ひとりが歴史文化資源の継承を担う。

幅広い分野と多様な価値を持つ国見の歴史文化を把握する〔過去と現在をつなげる〕及び、歴史文化をより良い状態で後世へ継承する〔現在と未来をつなげる〕の方針は、本構想における「歴史文化資源の保存」に関わる基本方針である。両方針は、現存する個々の資源だけではなく、ストーリーに沿った

関連文化財群を町の歴史文化を証明する一体的なものと捉え、後世へ継承することを示す。有形の資源はそのものが現存する状態、無形の資源は技術や行為が存続する状態を基本とし、滅失・存亡の危機に瀕した資源については、記録による保存の対応を行う。また、これらをより高い価値を有した状態で後世へ継承するためには、歴史文化資源の価値を把握するための調査研究と記録保存、継承するための適正な保存管理と整備、継続的な利用・実施などの各種対応が必要となってくる。

関連文化財群（ストーリー）を通して国見らしさを発見・発信する〔資源と資源をつなげる〕、歴史文化の価値を広く共有する〔人と人をつなげる〕及び、町民一人ひとりが歴史文化の継承を担う〔人と資源をつなげる〕の方針は、本構想における「歴史文化資源の活用」に関わる基本方針である。これらの方針は、関連文化財群が紡ぐストーリーを通して明確となった歴史文化資源の価値や魅力を後世へ継承するための取り組みに活かすことを示す。

町に広く所在する多種多様な歴史文化資源を存続させるためは、歴史文化資源単体ではなく資源と資源をつないだ関連文化財群（ストーリー）を通して国見らしさを発見・発信し、その価値を広く共有することで、一人ひとりが歴史文化の継承を担う必要がある。また、国見らしさを発信し、価値を広く共有するためには観光振興や学校教育・生涯学習との連携も重要となる。究極的には、歴史文化資源が所在する地域の住民や団体が主体となる歴史まちづくりをめざす。

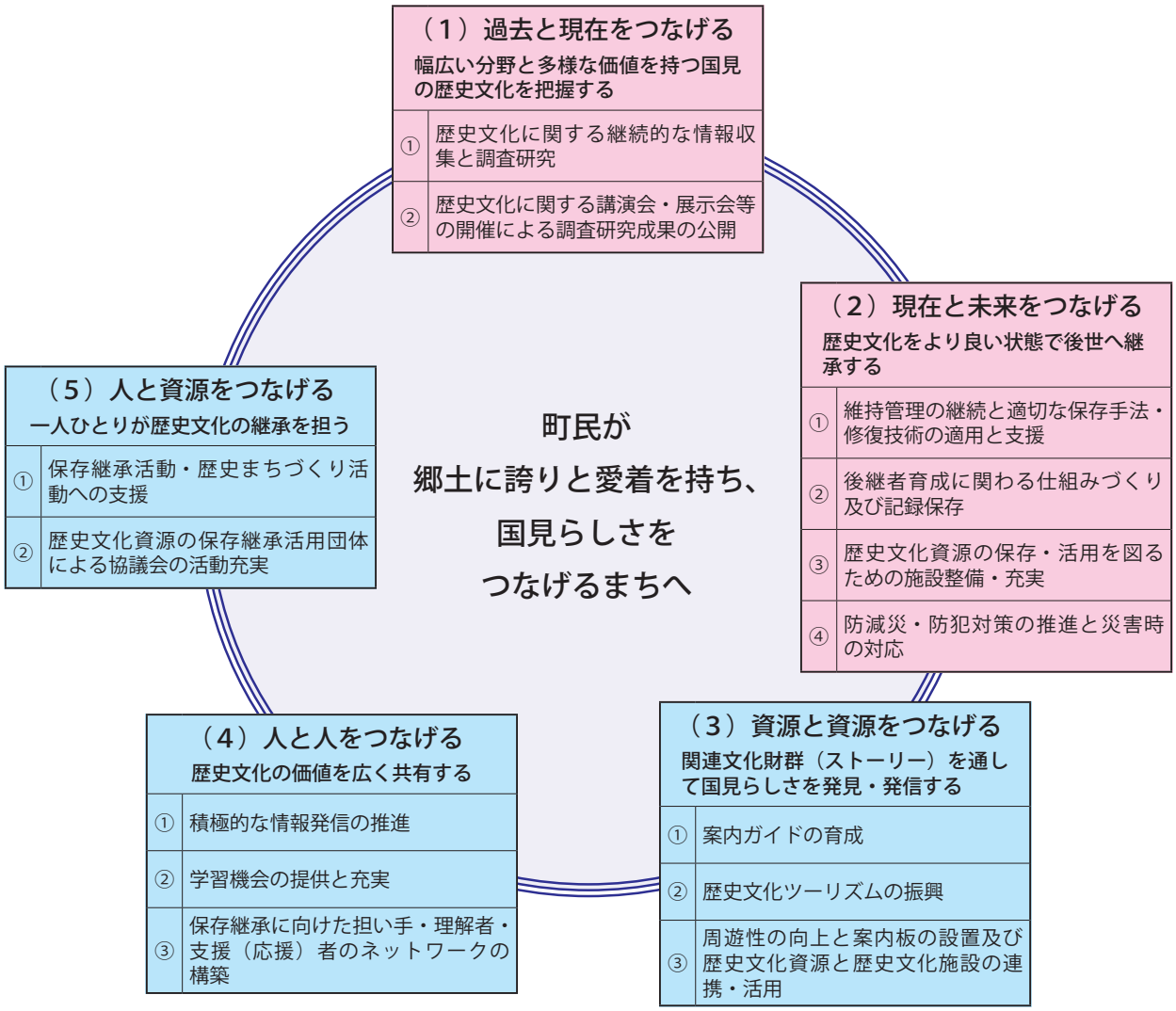

図 7-2　歴史文化資源の保存・活用に向けた基本方針と具体的な取り組み　全体像

なお、歴史文化資源の保存と活用は相互的、相乗的であることから、いずれかに偏ることなく一体として捉えるべきである。

（２）具体的な取り組みに向けた考え方

上記基本方針のもと、具体的な取り組みに向けた基本的な考え方を整理する。

まず、本町は平成 27（2015）年度から令和６（2024）年度までの 10 年間を計画期間とする「国見町歴史的風致維持向上計画」の認定を受け、文化財保護・歴史まちづくりに関わる取り組みを重点的に推進している。本構想においても、令和６（2024）年度までは同計画事業をアクションプランとして位置付け、引き続き事業を実施していく。

また、町内全域に設定した国見町歴史文化保存活用区域における ” 拠点となる施設 ” と、特に活用に関わる具体的な取り組みに向けて意識すべき ” 活用エリア ” について整理を行い、事業を展開する際の基礎的な考えとする。

更に、本構想は同歴史的風致維持向上計画期間終了後の取り組みを見据えた考えを示すものとして、住民主体・住民連携の取り組みを主体とする方針について示す。

① 国見町歴史的風致維持向上計画期間における具体的な取り組みについて

国見町歴史的風致維持向上計画では、平成 27（2015）年度から令和６（2024）年度までの期間において６項目の事業を実施している。これらの事業は、同計画の重点区域内における整備事業と町内全域を対象とする調査・教育普及事業からなり、本構想の文化財保存・活用の基本方針とも合致する取り組みである。

本構想においても、同計画事業をアクションプランとして位置付け、これまでの成果を活かした事業展開を行うため、一体的な取り組みを行う。

【国見町の歴史的風致維持向上施設の整備及び管理に関する事項】

1　阿津賀志山防塁の保存・活用に関する事業
2　伝統を反映した人々の活動に関する事業
3　歴史的建造物に関する事業
4　歴史的建造物・遺産を取り巻く環境に関する事業
5　歴史的風致に対する意識向上と情報発信に関する事業
6　歴史文化資源の総合的な把握に関する事業

② 保存・活用に向けた拠点施設について

国見町歴史文化保存活用区域における各事業を展開するにあたり、以下の３施設を保存・活用の核となる拠点施設として位置付ける。具体的な取り組みは、３施設間の連携・連動を図り、更に周辺の歴史文化資源・公共施設等と積極的につなげることで周遊性を高め、全町的な展開をめざす。

本町の歴史文化資源の収蔵・研究とガイダンスを行う中核施設である国見町文化財センター「あつかし歴史館」は、文化財保護・歴史まちづくりに関わる拠点とする。同館は、国指定史跡「阿津賀志山防塁」の『同史跡整備計画』においても史跡のガイダンス施設と位置付けられ､展示･解説を行うとともに、地域に親しまれる歴史館をめざし､「あつかし歴史館サポーター」による住民参画の運営を展開している。また、地元住民団体と連携した「遊びと学びのミュージアム事業」を実施し、有形・無形の民俗文化財に関わる体験イベントを開催するなど、幅広い歴史文化を発信し、本構想においても、中心的役割を担

【拠点施設】

	【国見町文化財センターあつかし歴史館】 平成 24（2012）年に閉校となった旧大木戸小学校を改修し、平成 29（2017）年 1 月にオープン。これまでの発掘調査で出土した埋蔵文化財など多くの文化財の収蔵・研究及びガイダンスを行っている。町内の魅力的な景観や史跡・建造物、人々の営みや信仰・祭礼などの生活文化について発信し、また、かつての学び舎のように地域の人々が集う場所となることをめざし、展示及びイベント事業を展開している。
	【道の駅国見あつかしの郷】 平成 29（2017）年 5 月オープン。滞在型まち巡りができる道の駅として宿泊施設を備え、農作物直売所、レストラン、カフェのほか、多目的ルーム、こども木育広場、歴史産業情報コーナー等がある。特徴のある大きな屋根は国指定史跡「阿津賀志山防塁」の曲線をイメージしている。
	【阿津賀志山防塁下二重堀地区歴史公園（仮称）】 令和 2（2020）年着工、令和 3（2021）年オープン予定。国指定史跡「阿津賀志山防塁」下二重堀地区に建設予定の歴史公園。藤原泰衡が源頼朝率いる鎌倉軍を迎え撃つために造られた約 3.2㎞の防御施設と、約 800 年の眠りから覚めた「中尊寺蓮」が眼下に広がる雄大な景観を楽しめる。

う施設である。

ひと・もの・ことについての交流、発見、発信ができる現代の宿駅として多くの来町者が訪れる「道の駅国見あつかしの郷」は、周遊性の起点となる拠点施設である。同施設では、本町の魅力を発信・提供し、来訪者が増加する夏には「国見町文化財ボランティア」による解説ブースを設置する「ご案内 week」を実施している。このため、本構想においては、歴史文化の価値を知る機会を創出する役割を果たす。

「阿津賀志山防塁下二重堀地区歴史公園（仮称）」は、その歴史性と長大なスケールを体感できる国指定史跡「阿津賀志山防塁」の下二重堀地区の特徴を活かし、現在整備が進められている。阿津賀志山防塁の価値を学び、周辺の地形と中尊寺蓮等の植生も活かした魅力的な史跡空間をめざし、長大な同史跡の中でも最初に来訪者を迎え入れる拠点となる。町内の歴史文化資源のうち、最も充実した便益施設を持ち、前述の２施設と連携した周遊性の核となる。また、現在、地元住民有志で組織した「国見町中尊寺蓮育成会」による中尊寺蓮の栽培管理が行われているが、公園整備後も住民が参画した運営・活用が検討されており、本構想においても個別の歴史文化資源において住民連携で活用が図られる中心的な施設となる。

③ 活用エリアについて

本町の歴史文化資源は、その歴史文化の特徴から５つに分類することができる。そして、この５つは、４つの関連文化財群（ストーリー）にまとめることができる。更に、それらが町域全体に広がり、重層

的に分布することから、様々な特徴・ストーリーを持つ歴史文化資源が互いに隣接し、あるいは重複している。これらの分布的特徴から、周遊性の検討や歴史文化ツーリズムなどの活用に関する具体的な取り組みに向けた基礎的な考え方として、以下の６つの活用エリアを設定する。

① 小坂峠から内谷春日神社、福源寺地蔵庵観音堂、旧小坂村産業組合石蔵などが所在する「羽州街道・小坂宿エリア」
② 奥山家住宅、鹿島神社など町域の中心に位置する「藤田宿エリア」
③ 阿津賀志山の麓から交通の要衝として町域を横断する「奥州街道エリア」
④ 貝田宿から貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋、御瀧神社、岩淵遺跡などを有する「貝田宿・光明寺エリア」
⑤ 阿武隈川とともに営み、繁栄した「阿武隈川左岸エリア」
⑥ 歴史的な出来事が刻まれ、義経の腰掛松、弁慶の硯石など多くの伝承と資源が残り、中尊寺蓮が広がる「阿津賀志山防塁エリア」

これらの活用エリアと拠点施設を活かし、周遊性のある活用を図るとともに、事業の全町的な波及・展開をめざし、保存・活用事業全体の底上げ・強化を推進する。

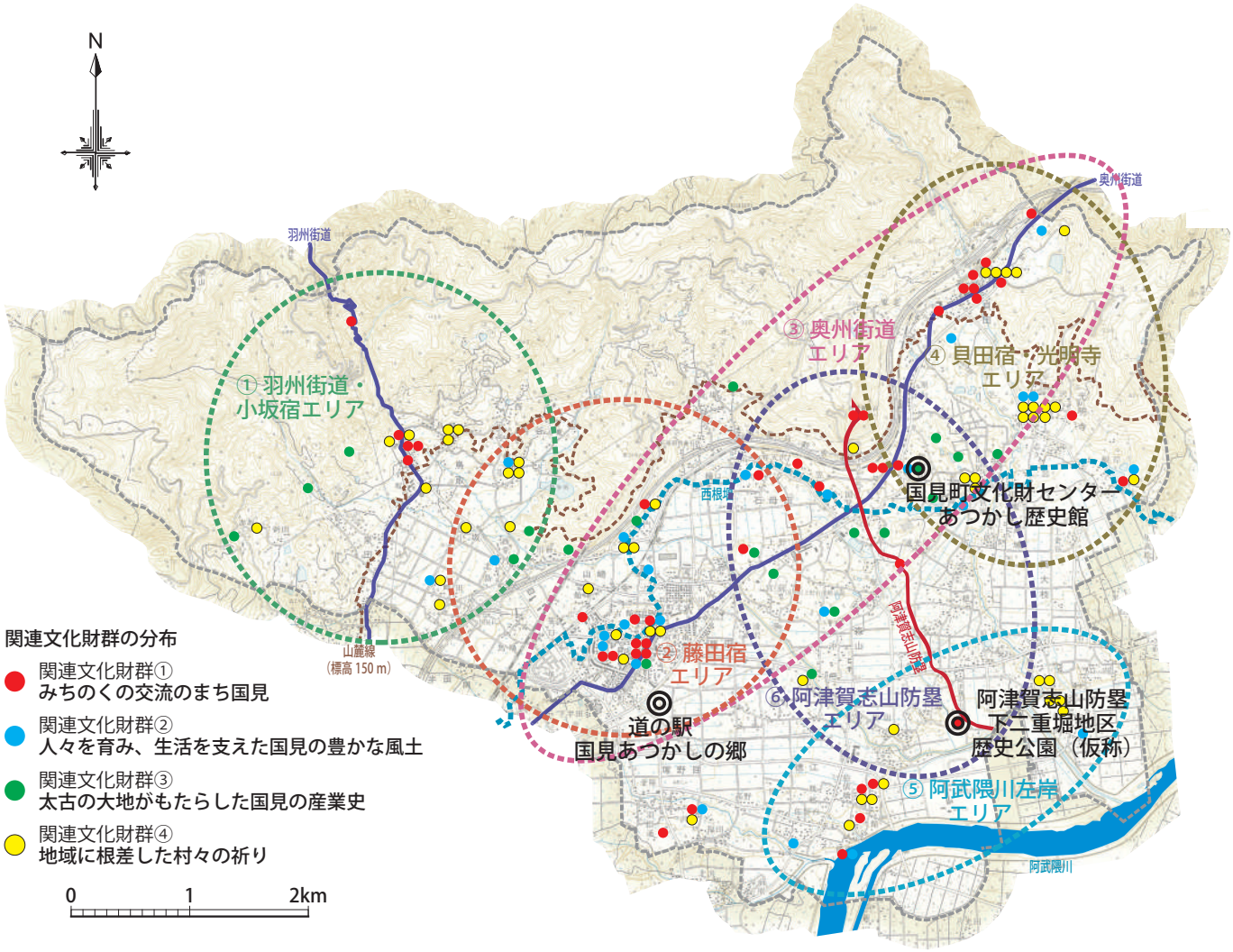

図 7-3　拠点施設と活用エリアの分布

④ 住民主体・連携による保存・活用に向けた具体的な取り組みについて

歴史文化資源と地域社会は密接な関係にあり、資源の保存・活用には地域住民の理解と協力は不可欠である。これまでの指定等文化財に対する保護だけでなく、未指定・未登録の文化財も含めた有形・無形の歴史文化資源の保護は、住民主体及び住民連携による保存・活用が必須である。

町民が資源の価値を認知・享受し、保存・活用の活動に関わるための継続的な普及・啓発や体制づくりに対する支援が必要であり、国見町歴史的風致維持向上計画期間終了後の令和７（2025）年度以降においては、それらの住民組織や民間団体による積極的な保存・活用が展開されるように取り組みを強化する。

地域で大切に受け継がれてきた歴史文化資源は、地域と町の「誇り」であり、大切に守り、伝え、継承していかなければならない。歴史文化資源の保存・活用に対する取り組みは、町民一人ひとりの保護意識を高め、誇りを取り戻し、更には集落・地域を維持・発展させていく原動力の一つである。そのためには、歴史文化資源が持つ特徴を把握し、その価値を理解し、大切に思う「こころ」と「ひと」を育て、歴史文化資源を活かしたまちづくりを住民主体・連携のもとに進めていく。

３　保存・活用の具体的な取り組み

前項までに示した保存・活用に関する課題・基本方針を踏まえ、本町の歴史文化資源に対して、今後必要となる保存・活用にかかる具体的取り組みは、次のとおりである。

（１）過去と現在をつなげる

① 歴史文化に関する継続的な情報収集と調査研究
② 歴史文化に関する講演会・展示会等の開催による調査研究成果の公開

① 歴史文化に関する継続的な情報収集と調査研究

平成 27（2015）年度から令和元（2019）年度に重点的に実施した「歴史文化遺産の総合的な把握のための調査事業」の成果をベースに、各分野間における調査歴・情報量の隔たりや相互関係・各ストーリー（関連文化財群）との関係性について検証・整理し、情報収集と調査研究を進める。また、歴史文化資源の継承状況に関する現況把握についてもあわせて行う。これらの事業は、地域の住民団体、国見町郷土史研究会と連携して実施を図る。

図 7-4　郷土史研究会のイベント案内

② 歴史文化に関する講演会・展示会等の開催による調査研究成果の公開

把握された歴史文化についての情報収集と調査研究の成果を報告するため、専門家を招聘して講演会・シンポジウムを開催するほか、国見町文化財センター「あつかし歴史館」での展示・公開を実施する。また、地域で積極的に活動している国見町郷土史研究会による活動成果発表・研修に対する支援を行い、住民主体による活動・発表の促進を図る。

（２）現在と未来をつなげる

① 維持管理の継続と適切な保存手法・修復技術の適用と支援
② 後継者育成に関わる仕組みづくり及び記録保存
③ 歴史文化資源の保存・活用を図るための施設整備・充実
④ 防減災・防犯対策の推進と災害時の対応

写真 7-9　旧佐藤家住宅茅葺替え工事

① 維持管理の継続と適切な保存手法・修復技術の適用と支援

公有化された歴史文化資源については、維持管理の継続と適切な保存手法・修復技術の適用を積極的に推進する。

個人・地域等が所有する歴史文化資源については、情報収集による現状把握と所有者への助言を行い、適切な管理がなされるよう指導・支援する。

保存・修復に関わる事業に対しては、国・県・町及び民間の補助制度の活用を検討する。特に、歴史的建造物に関しては、本町における補助制度である、指定文化財を対象とする「国見町文化財保存事業補助金」、昭和 56（1981）年以前に建築した戸建住宅を対象とする「国見町木造住宅耐震改修等補助金」などを用いながら支援を行う。

② 後継者育成に関わる仕組みづくり及び記録保存

無形・有形の歴史文化資源ともに、継承を担う後継者育成の仕組みづくりは重要である。

無形民俗に関わる資源については、町無形民俗文化財「内谷春日神社太々神楽」の同保存会と町無形民俗文化財「鹿島神社例大祭」の国見伝統文化保存会が後継者育成に関わる具体的な取り組みを実施している。町では、補助による支援とともに、その内容を冊子にまとめた「マンガで読む国見町内谷太々神楽ものがたり」（平成 29〔2017〕年度）、「鹿島神社例大祭ハンドブック」（平成 27〔2015〕年度）を作成し、普及啓発に努めている。また、既に実施している町内全域の子どもを対象とした「子ども太々神楽体験教室」をはじめ、多くの子どもや若者が積極的・主体的に神楽や祭礼に参加できる活動を支援する。

そのほかの歴史文化資源については、調査における現状把握を踏まえ、維持管理・保存継承を行う担い手や後継者となるべき人々に対し、普及啓発を行うことで意識向上を図り、持続的な維持管理と保存継承をめざす。

図 7-5　マンガで読む
国見町内谷太々神楽ものがたり

図 7-6　鹿島神社例大祭
ハンドブック

③ 歴史文化資源の保存・活用を図るための施設整備・充実

国指定史跡「阿津賀志山防塁」をはじめ、整備を必要とする歴史文化資源に対して、保存・活用を図るための施設整備・充実を図る。

平成 27（2015）年度から令和６（2024）年度までを事業期間とする「阿津賀志山防塁第Ⅰ期史跡整備事業」において、阿津賀志山防塁下二重堀地区と国道４号北側地区の史跡整備と周辺整備を行う。

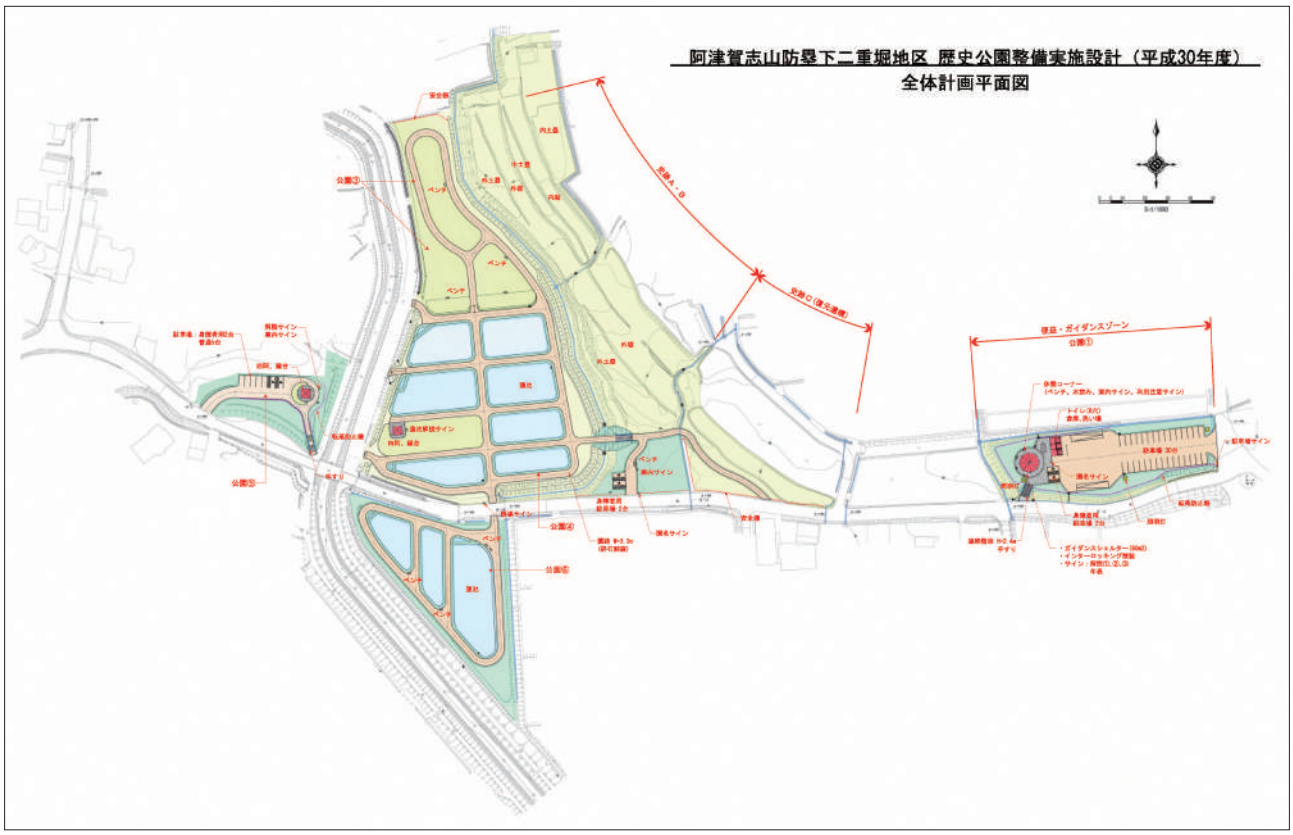

図 7-7　阿津賀志山防塁下二重地区歴史公園整備　全体計画平面図

④ 防減災・防犯対策の推進と災害時の対応

近年多発する自然災害、火災、損壊、盗難への防減災・防犯対策は、より幅広く、継続的な取り組みが必要となっている。ここでは予防的な防減災・防犯対策と災害時の対応について、『国見町地域防災計画』に即しながら整理する。

【防減災・防犯対策】

「文化財保護強化週間」（11/1 ～ 7）及び地元消防団と連携した「文化財防火デー」（1/26：町内５地区での歴史的建造物に対する消防訓練・町全体での防火運動）を実施し、火災予防体制の強化・防犯対策に関する普及啓発とともに、地域における個別訓練を実施している。

また、防減災・防犯設備等の整備強化活動として、文化財所有者・管理者に対し通報・警報装置・消火設備・防火設備の設置に努めるよう、周知・啓発を深めるとともに、県指定重要文化財「旧佐藤家住宅」や国見町文化財センター「あつかし歴史館」での適切な機器の更新・点検と訓練を実施する。

写真 7-10　文化財パトロール

写真 7-11　文化財防火デー

更に、伊達地方消防組合と町が連携した火災予防査察の実施や町・県文化財保護指導員・国見町文化財保護審議会委員・国見町文化財ボランティアなど関係者が連携した恒常的な「文化財パトロール」の実施による巡視を行うとともに、本構想策定において把握した歴史文化資源リストに基づき所在確認や現状把握を進め、災害発生時には歴史文化資源リストによって被害状況を迅速に把握する。

【災害時の対応】

災害発生時は、２次災害発生の危険性などを考慮しながら、指定文化財等の被害状況を迅速に把握し、県教育委員会等の関係機関に連絡するとともに、建造物については状況に応じて応急対応を行う。また、美術工芸品等の管理場所が被害を受けた場合は公共施設で一時保護する。

更に、被災した歴史文化資源の情報把握に努め、必要に応じて、災害発生後の歴史文化資源の保全に向け、町は国・県の関係機関と連携しながら、専門家の助言・支援の調整を図り、文化財レスキューを行う。

写真 7-12
東日本大震災時の文化財レスキュー活動
（ふくしま歴史資料保存ネットワークの支援により実施）

（３）資源と資源をつなげる

① 案内ガイドの育成
② 歴史文化ツーリズムの振興
③ 周遊性の向上と案内板の設置及び歴史文化資源と歴史文化施設の連携・活用

写真 7-13　くにみ周遊ツアー

① 案内ガイドの育成

歴史文化資源の案内を担う「国見町文化財ボランティア事業」を推進し、同ボランティアの養成・研修を通じて、人材育成を行う。

写真 7-14　案内板の設置

② 歴史文化ツーリズムの振興

歴史文化ツーリズムは、価値感を共有するために有益な手段であることから、現在の「くにみ周遊ツアー事業」における歴史文化資源の積極的な活用と多様な来訪機会の創出に向けた民間事業者等との連携を図る。

③ 周遊性の向上と案内板の設置及び歴史文化資源と歴史文化施設の連携・活用

町内の歴史文化資源は広範囲に点在する。来訪者が歴史文化資源をスムーズに、そして深く理解するためには、周遊の検討・案内板の設置が不可欠であることから、「周遊性向上検討・案内板設置事業」を進める。また、道の駅国見あつかしの郷、国見町文化財センター「あつかし歴史館」、国見町観月台文化センター、現在整備が進む「阿津賀志山防塁下二重堀地区歴史公園」（仮称）などの歴史文化施設との連携・連動した活用も図る。

（４）人と人をつなげる

① 積極的な情報発信の推進
② 学習機会の提供と充実
③ 保存継承に向けた担い手・理解者・支援（応援）者のネットワークの構築

① 積極的な情報発信の推進

より広域に、より多様な人々に届くよう、様々な媒体による積極的な情報発信を継続的に行う。「広報くにみ」（毎月発行）、国見町 HP 及び観光ポータルサイト・SNS（随時更新）による情報発信にとどまらず、報道機関への投げ込みによる取材や町民や来訪者自らによる情報発信も促進する。

写真 7-15　民話の会による民話語り
（旧佐藤家住宅の活用）

② 学習機会の提供と充実

テーマや対象を絞らず、多種多様な学習機会を創出するため、歴史まちづくりシンポジウムや公開活用事業による教育普及、学校教育と連携したふるさと学習「国見学」、生涯学習と連携した町民講座、住民団体の国見町郷土史研究会と連携した公開研修講座の開催を充実する。

写真 7-16　阿津賀志山防塁
活用推進懇談会の活動

③ 保存継承に向けた担い手・理解者・支援（応援）者のネットワークの構築

多種多様な普及・啓発、保存継承に向けた担い手・理解者・支援（応援）者の育成とネットワーク構築の取り組みを支援する。

未だ萌芽的な取り組みだが、阿津賀志山防塁の活用を推進するための住民組織「くにみ阿津賀志山防塁活用推進懇談会」の活動を支援しながら、めざすべきネットワークの形と保存・活用の担い手となる組織づくりを進める。

（５）人と資源をつなげる

① 保存継承活動・歴史まちづくり活動への支援
② 歴史文化資源の保存継承活用団体による協議会の活動充実

① 保存継承活動・歴史まちづくり活動への支援

所有者等や地域の団体の保存継承活動・歴史まちづくり活動への支援は、行政と当事者間の相互理解と信頼関係が不可欠である。

これまでの文化財保護関係団体支援事業、無形民俗文化財活動支援事業、まちづくり関係の助成事業を引き続き行い、住民・団体・地域が主体となる活動を支援する。

写真 7-17　内谷春日神社太々神楽保存会

② 歴史文化資源の保存継承活用団体による協議会の活動充実

保存継承活用団体が加盟する歴史まちづくりフォーラムの活動を充実させるため、加盟団体の拡充と総会・協議会の開催、具体的な取り組みに対する意見交換などを行い、全町的な取り組みに発展させる。

写真 7-18　国見町中尊寺蓮育成会